

アメリカ人の依頼表現における男女差 ——性別と親密さの比重——

赤堀志子

Differences in the Use of Directives in the United States

Naoko Akahori

Abstract

English has no grammatical markers which identify the gender of the speaker. It has, however, been argued that, in certain cases, male and female speakers tend to use different ways of speaking. In this paper, I have investigated by questionnaires the way American speakers make a request to their friends, and compared the expressions that male and female informants preferably use.

The results of my investigation show that male and female speakers tend to use different kinds of expressions when they make a request. Male speakers tend to change their expressions depending on the degree of their intimacy with the listeners. They use polite forms of making a request when the listeners are not intimate. If those who do them a favor are close friends, they will ask them in a more casual way, even bluntly without showing any politeness. Male speakers also generally use more polite expressions when they speak to female friends than to males, while female speakers are found not to change their expressions as much depending on the sex of the persons they speak to. Besides, they generally use more polite expressions both to the male and female listeners alike.

The difference between the male and female ways of making a request indicates that men choose from different expressions, depending on whom they are talking to, while women tend not to change their way of speaking. This result reflects the different ideas between male and female speakers about gender and intimacy.

序

日本語は男女の言葉の差がはっきりしている言葉の一つであるが、英語には男女の言葉の差がはっきり現れないといわれている。日本語の男女の言語差として、「よ」や「ね」といった終助詞による語尾の違いが顕著な例として挙げられる。英語には確かにこの終助詞のように、はっきりと男女差を表す marker は見られない。だが、その一方でこれまで男女の言葉の違いがあることが論じられてきた。woman と man, lady と gentleman など、男女を表す言葉のイメージの格差を比較分析している Robin Lakoff (1975) の *Language and Woman's Place* は、言語をフェミニズムの視点から論じて言語学に新しい分野を確立した。この論文の中で、Lakoff は男女の言葉の使い方にも言及しており、女性は *mouve* や *exu* といった微妙な色を示す言葉を使うのに対し、男性は使用しない傾向にあると述べ、これは男性の世界では色の些細な違いなど取るに足らない問題だと考えていることの現れだと主張している。¹

Lakoff (1975) 以来、男女の言葉の違いを研究する分野が活発になり、男女を表したり、男女が用いる言語の差について、'I think' や 'you know' といった *hedge* 表現や、付加疑問文、疑問文、依頼文、悪態やタブー語など、単語のレベルにとどまらずに表現全体に焦点が当てられるようになった。Jennifer Coats (1993) は *Women, Men, and Language* において、これまで行われた男女差の研究を比較検討している。その結果、女性は *hedge* 表現や付加疑問文が多く、依頼するときには男性よりも丁寧な表現を用い、悪態やタブー語を避けるという考え方が一般的に定着しているが、様々な研究を並べてみると、結果はまちまちであり、必ずしも女性のほうが丁寧に話すという固定観念が正しいとはいえないと結論付けている。²

これまで行われた男女間の言葉の違いに関する研究にばらつきがあるのは、研究が行われた話し手の背景、会話が行われている場所といったコンテキストが研究によって異なっているからだと思われる。本論で扱う依頼文という分野に限ってみても、依頼する側と依頼される側との人間関係や依頼の内容によって使われる表現は異なってくる。というのも、男性か女性かという性別以外に、地位の差や親しさといったほかの要素が表現に影響を与えてくるからである。

依頼とは、相手に働きかけて自分のためにある行動を起こしてもらうことである。その点で、依頼とは丁寧な命令ともいえる。依頼は日常的に頻繁に行われているコミュニケーションでありながらも、命令の意味合いを含んでいるために、相手との人間関係に左右されたり、逆に影響を与えたりする。このことは、依頼表現に様々な種類があることから明らかである。われわれは意識的

にも無意識的にも相手と自分との関係を考慮して、依頼の表現を決めているのである。

Susan Ervin-Tripp (1976) は依頼表現を文法的に6つに分類し、そこから依頼者が表現を選び出す際に、それぞれの依頼表現の持つ機能ばかりではなく、依頼者と依頼相手とを取り巻くコンテキスト、つまり話し手と聞き手の社会的地位、年齢、親密さ、性別、依頼の行われる場所も影響を与えている、と論じている。³ このうち、話者と聞き手の上下関係が明らかに現れる、社会的地位、年齢、親密さ、依頼の行われる場所、という要素が、依頼表現にどのように影響を及ぼしているかは比較的容易に想像することができる。しかし、性別に関しては、社会の動きを無視しては論じることはできないように思われる。というのも、性差というのはアメリカにおいて差別と絡んだ社会問題だからである。

アメリカでは1950年代からマイノリティ運動が具体化し、1960年代にピークを迎えた。フェミニズム運動もその例に漏れずマイノリティ運動の一環として改革を推し進め、その結果として法的な性の平等を勝ち取ることになる。具体的には1986年に成立した男女平等雇用均等法が挙げられる。この法律の成立以前は、女性は社会的に男性よりも不利な立場に置かれていたわけであるから、性差も一つの社会的な階級差とみなされてきた。男女の平等が法的に確立し、女性が社会に進出しやすくなったことは、言語にも影響を与えている。そのもっとも顕著な例は、いわゆる “Political Correctness Movement” と呼ばれる、差別的な言葉を中性的な言葉に書き換える動きである。⁴ だが、平等を求める動きが活発化すると、単語のレベルに留まらず、表現そのものにも影響を及ぼす。特に、人間関係を考慮しなければならぬ依頼表現は影響を受けやすいはずである。

Ervin-Tripp (1976) は *directive* を選ぶ時の要素として、性別を挙げているにもかかわらず、男性と女性それぞれにどの依頼表現が対応するかを明示していない。井出祥子他 (1986) の『日本人とアメリカ人の敬語行動 大学生の場合』も、日本人とアメリカ人との差に焦点を当てるものであり、男女差について詳しくは論じていない。そこで、本論では依頼の表現に焦点を当て、男女差を比較した。特に性差と親密さに焦点を絞り、依頼者の性別ばかりでなく依頼相手の性別ごとにどの表現が用いられているのかその傾向を探るとともに、親密さと性差とではどちらが優先されるのかを探ることが本論の目的である。また、アンケートで用いた依頼内容については、Ervin-Tripp が性質ごとに分類した依頼表現に基づき、井出祥子他 (1986) の『日本人とアメリカ人の敬語行動 大学生の場合』にならって、「ペンを借りる」とした。⁵

1. 依頼表現と性差

アンケートの実施方法について述べる前に、まず、Ervin-Tripp の分類した六種類の依頼表現について述べておく。Ervin-Tripp が用いているデータは、1964年以來、依頼表現のデータを収集するプロジェクトによって集められたものである。このプロジェクトでは、次の4つの方法でデータが集められている。1) さまざまな場面で任意の二人の間で交わされた依頼表現を書き取る。2) 自然に話された会話を録音したテープから書き取る。3) 特定の場面を設定し、依頼する相手を特定して、その場面と相手にあった依頼表現を使ってもらう。4) どのような依頼をした場合に、誤解が生じてしまったのかを書き取る。こうして集められたデータを用いて Ervin-Tripp は次のように依頼表現を分類している。

- (1) Need statements ('I need a match. ')
- (2) Imperatives ('Gimme a match', 'A match. ')
- (3) Imbedded imperatives ('Could you gimme a match?')
- (4) Permission directives ('May I have a match?')
- (5) Question directives ('Gotta match?')
- (6) Hints ('The matches are all gone. ')

Need statement では、文字通り、need が使われるほか、want も用いられる ('I want you to give me a pen. ')。Need statement は、次の二つの場面で用いられる。一つは、仕事上の取引、といったはっきりと何をすべきなのかを伝える必要の高い場面である。こうした場面で上司が need statement を用いる場合、そこで求めていることは、部下が当然果たすべき義務だと上司が考えていることである。Need statement が用いられるもう一つの場面は、家庭である。Need statement は子供たちが早い段階から用いる依頼表現であり、お互いに親密な家族間でよく用いられる。

Imperative は、いわゆる命令文である。やるべき行動がはっきりしているときには動詞が省かれ 'A match. ' のように目的語だけで用いられることもある。ほかには、you + imperative、 'Here ' など相手に注意を呼びかける言葉がつくもの、imperative + 付加疑問、そして語尾を上げる言い方といった形がある。Need statement と同じように、依頼内容が相手の義務と考えられる時に用いられるが、義務の範囲外と考えられるときにも、 'please ' という言葉を合わせて使われる点で、need statement とは異なっている。また、Ervin-Tripp のデータには依頼をする

相手が離れた場所にいると、imperative の使用される頻度が高まり、また、imperative の後ろに付加疑問文を付ける率も高くなるという傾向が現れていた。

Imbedded imperative では、依頼内容と依頼を受ける人がはっきりと明示され、依頼内容を表す前に、'Would you ~?' や 'Can you ~?' といった丁寧な表現が付け加えられる。'Can you ~?' に始まる imbedded imperative の場合には、能力を尋ねる yes/no question と紛らわしいこともあって、依頼としか受け取り得ない場合に用いられる。たとえば、Ervin-Tripp (1976: 34) は次のような例を挙げている。

(大人が車の後ろに座っているティーンエイジャーに)

Can you keep your voices down?

Ervin-Tripp によれば、子供たちは初め、命令する時には imperative を、頼む時には imperative に 'please' を用いて区別するが、成長するに従って命令する時には imperative を、頼む時には imbedded imperative を用いるようになる。会社のように上下の地位の差がはっきりしている場所では、地位と年齢に応じて依頼の表現が変化する。年齢も地位も近い場合には imperative が、年齢と地位が離れている場合には imbedded imperative のほか、hint や question directive が用いられる。

Permission directive とは 'can'、'could' そして 'may' といった許可を求める助動詞を用いた依頼文である。これまでの依頼文が相手の行なうべき行動を言い表わしていたのに対し、permission directive は話し手自身が望んでいる行動を述べて、許可を求める表現である。目上の人や地位の高い人に用いられるほか、知らない人や仲間以外にも用いられる。

Question directive は、文構造そのものは通常の疑問文と変わらないので、質問とも依頼文とも考えることができる。否定文の付加疑問文も question directive に含まれ、Ervin-Tripp によれば、否定文の付加疑問文によって依頼された場合、その依頼に応じる率は五分五分であることが分かっている。つまり、これまでの4種類の依頼表現とは異なり、依頼された相手が断りやすい、あるいは依頼の内容を実行するのが難しい、依頼に応える義務を負っていないと思われる場合に用いられる。

Hint は question directive よりも曖昧な表現であり、一見ただけでは依頼文とは分からず、コンテキストから依頼であることを暗示させる言い方である。そのため、コンテキスト次第で厭味を含んだ表現となったり、命令を和らげる言い方にもなりうる。Ervin-Tripp (1976: 43) は次のような例を挙げている。

(すでに口の開いているトマトソースがあるのに、新しく開けようとした人に)

There 's a big can of tomato sauce. (好意的)

Why don 't you use up the stuff in the refrigerator? (非好意的)

上記の文はどちらも *hit* である。Ervin-Tripp は上の例を好意的、下の例を非好意的と捉えているが、言い方によってはどちらの例も好意的にも非好意的にもなりうる。だが、いずれの例も、コンテキストがないと依頼であることが通じず、また厭味な言い方だと受け取られてしまう可能性を含んでいる。そこで、*hit* が用いられるのは非常に親しい間柄に限られ、明確なコミュニケーションを必要とする仕事場などでは用いられない。

2. アンケート調査による依頼表現の分析

2.1. アンケートの実施方法

Ervin-Tripp の示した以上の6種類の依頼表現に基づいてアンケートを作成し、男女間で依頼表現にどのような違いが見られるのかを調査した。依頼表現と性差の関わりを研究するにあたり、1994年に仕事を持っているアメリカ人男性21名、女性17名にアンケート調査を行った。アンケートは1990年に滞在したアメリカのホームステイ先に依頼して、同僚や友人に配布してもらった。そのため、年齢は20代から40代まで、職業は教師、薬剤師、司書、旅行添乗員、都市計画家、エンジニアとさまざまである。アンケートは二部に分け、前半では自由に依頼表現を書いてもらい、後半では15の選択肢の中から適切と思われる表現を選んでもらうという方法を使った。後半部分の選択式については、適切と思われるものをすべて選んでもらうことにした。アンケートに用いた15の依頼表現は以下の通りである。

(1) Need Statements

(1-a) I need your pen for a minute.

(1-b) I need your pen for a minute. Do you mind?

(2) Imperatives

(2-a) Give me your pen for a minute.

(2-b) Let me borrow your pen for a minute.

(2-c) Pen!

(3) Imbedded Imperatives

- (3-a) Would you lend me your pen for a minute?
 (3-b) Can you lend me your pen for a minute?
 (3-c) Would you mind if I borrowed your pen for a minute?
- (4) Permission Directives
 (4-a) May I borrow your pen for a minute?
 (4-b) Can I borrow your pen for a minute?
- (5) Question Directives
 (5-a) Do you have a pen I can use for a minute?
 (5-b) You don't have a pen, do you?
 (5-c) Do you happen to have a pen?
- (6) Hints
 (6-a) Oh! I forgot to bring my pen.
 (6-b) I can't find my pen.

これら15の表現の中から男女の親しい友人、知り合ったばかりでまだ親しくない友人のそれぞれに対して用いるのに適切なものをすべて選択してもらった。

2.2. 性別と親密度

アンケートの結果を依頼者の性別、依頼相手の性別ごとに検討していくことにする。まず、男女それぞれについて、依頼相手が同性で親しい友人の場合をみていく。

論文末の付表から明らかなように、もっとも適切な表現として選ばれた依頼文は (2-a) Gimme your pen for a minute. である。インフォーマントの全員に選ばれたこの表現は、Ervin-Tripp の分類の *imperative* にあたり、むき出しの命令文である。Ervin-Tripp によれば、*imperative* は会社などの仕事場において社会的な地位がほぼ同じで年齢も近く、親しい関係にある人間同士で用いられる表現⁶ということであるから、親しい友人に対して用いるにも適切だと考えられる。(2-b) Let me borrow your pen for a minute. も (2-a) 同様に *imperative* の一つであり、95%の男性インフォーマントから親しい友人に用いるのに適切な表現として選択された。(1-a) I need your pen for a minute. の81%、(4-b) Can I borrow your pen for a minute? の71% があとに続いている。

女性は親しい友人にどのような表現を用いているのだろうか。表1に見られるように、男性全体がいくつかの決まった表現を用いるのに対し、女性は (3-b) Can you lend me your pen for a minute? を53%、(3-a) Would you lend me your pen for a

minute?, (1-a) I need your pen for a minute. が 47%と、人によって様々な表現を使っていることが分かる。

次に、異性の親しい友人にはどのような表現で依頼をするのかを見ていくことにする。性別が異なると、用いられる表現も傾向も異なるのだろうか。男性についてみると、男性と女性とでは明らかに依頼表現の使い方が異なっている。依頼者と依頼相手がどちらも男性の場合、インフォーマントの全員に選ばれた (2-a) Give me your pen for a minute. を始めとして、(2-b) Let me borrow your pen for a minute. といった、いわゆる命令文である imperative が使われている。男性が親しい女性に使う場合にも、これら二つの表現はどちらも他の表現と比べて、多くのインフォーマントから選ばれてはいるが、相手が男性の時と比べると、使用する割合が低くなっている。(2-a) Give me your pen for a minute. は相手が男性の時には100%、(2-b) Let me borrow your pen for a minute. は 95% のインフォーマントが使用すると答えているのに対し、相手が女性になると、どちらも57%にまで減少している。

この2つの表現に限らず、全体的に男性は親しい女性に対して依頼をする時、人により用いる表現がばらついていることがわかる。相手が男性のときには、特定の表現に結果が集中していたことを考えれば、男性は性別に左右されて表現を変えていることになる。女性の場合は、むしろ相手の性別とは関係なく親しさに応じてほぼ同じ表現を用いている。先に述べたように、アンケートの前半部分ではそれぞれのインフォーマントに親しい友人、親しくない友人に対して用いる表現を自由に記してもらったが、すべての項目に同じ表現を用いていた女性は二人いて、その内の一人は「なぜ相手によって表現を変えるのか」という質問を逆に返してきた。そこまで顕著な例ばかりではなかったが、全体として、女性のインフォーマントは相手の性別に関係なく同じ表現を用いる傾向にあった。

親しい友人に対して用いられる表現を比較した結果、男性は性別に左右され、女性は性別に左右されずに、依頼表現を決定する傾向が現れた。つまり、男性の話し手にとっては親しい相手であっても性別が異なれば、人間関係も異なってくる。また、親密度に関して言えば、男性は親しさと性別を同じように考慮するが、女性は性別よりも親しさを考慮して依頼の表現を決めている。

では、親しくない相手の場合はどうであろうか。同性の相手に対して依頼をする場合から男女それぞれの結果を見ていくことにする。まず男性の選んだ依頼表現を見てみると、親しい男性の友人に対して適切な表現としてインフォーマント全員に選ばれた imperative の (2-a) Gimme a pen for a minute. そして 81% のインフォーマントに選ばれた (1) I need your pen for a minute. はどちらも親しくない友人に対しては 0%となり、(2-a) について多くのインフォーマントに選ばれた (2-b)

Let me borrow your pen for a minute. も 14% という低い割合になっている。その代わりに親しい友人に対しては、38% のインフォーマントにしか選ばれなかった permission directive の (4-a) May I borrow your pen for a minute? がもっとも高く、81%となっている。そのあとに同じく permission directive の (4-b) Can I borrow your pen for a minute? の 76% がつづき、inbedded imperative の (3-c) Would you mind if I borrowed your pen for a minute? の 67%、question directive の (5-a) Do you have a pen I can use for a minute? のおなじく 67%、inbedded imperative の (3-a) Would you lend me your pen for a minute? の 61% となっている。

一方、女性が依頼をする場合には、どのような結果になったかといえば、最も多くの女性から親しい友人にたしてふさわしいと判断された need statement の (1-a) I need your pen for a minute. は 0% となった。一方で同じく親しい友人に相応しい表現として 47% の女性から選ばれた inbedded imperative の (3-a) Would you lend me your pen for a minute? は、親しくない友人に対しても同じく 47% の女性から選ばれている。ただし、それ以上に多くの女性に選ばれた表現がある。同じく inbedded imperative の (3-c) Would you mind if I borrowed your pen for a minute? そして permission directive の (5-a) Do you have a pen I can use for a minute? である。前者は 59%、後者は 53% の女性から選ばれている。どちらも依頼相手が親しい同性の友人の場合には、他の表現と比べても、前者は 18%、後者は 29% と、低い割合となっている。この結果から分かることは、男性も女性も依頼をするときに相手とどの程度親しいかに左右されて言い方を変えているということである。当然のことながら親しくない相手ほど丁寧な表現を用いる傾向にある。それぞれの依頼文の機能からこの結果を分析してみると、男性も女性も親しくない友人に対して依頼をするときには、依頼を受けるのが当然だという前提のもとに用いられる need statement や directive といった強い命令表現を避け、相手に許可を求める inbedded imperative や permission directive を用いている。依頼相手との親密度が低くなると、依頼表現は親しい友人に用いる表現として男性の 80% 以上のインフォーマントに選ばれた need statement や imperative はほとんどまったく使われず、inbedded imperative や permission directive, question directive に取って替わっている。男性も女性も親密度が低いほど丁寧な話し方をする傾向にあるが、男性の方が性別に影響を受けやすいことになり、男性は女性に比べると親しさにも性別にも左右されやすいことが分かる。

2.3. 依頼文の性質と性差

2.2. では親密度に焦点をおいて論じてきたが、ここではそれぞれの依頼文が男

性と女性のそれぞれにどのように用いられているのかを細かく検討する。Need statement は相手に自分の必要性を伝えるのみで、相手に依頼に応じてくれるように「頼む」という意味合いはまったく含まれていない。Imperative も同様に「頼む」言い方ではなく、相手に自分のためにある行為をするよう「命じる」言い方である。どちらも相手に命令する言い回しだという点では共通しているが、Ervin-Tripp も述べているように need statement はお互いを知り尽くした家族同士か、部下に命令する上司のどちらかに用いられることがほとんどで、⁷ imperative は同じような年齢や地位の人に日常的に用いられる依頼表規である。⁸ というのも自分はこれが必要だ、と言うだけで相手に行動を促すという行為は、相手を自分よりも低い立場、あるいは自分の要求にこたえて当然という考えを基盤におこなわれるからである。男性も女性もこの need statement を親しい友人に対して使う傾向にあることから、アメリカ人は親密な相手に依存し、甘えを見せていることが分かる。とくに、(1-b) のように Do you mind? という表現を付けない、シンプルな (1-a) の need statement の方が使用される頻度が高いことから、need statement を使う相手は気軽に依頼できる相手にかざられることを示しており、Ervin-Tripp の主張と一致している。また、女性よりも男性の方が親しい同性の友人に対してこの need statement をよく用いることから、親しい男性同士がほかのどの組み合わせよりも相互に依存し、表規の上でも親しさと依存を示す傾向にあることが分かる。

Imperative についても need statement と同様のことがいえるだろう。Imperative は相手にある行動を命じる言い方であるが、先に述べたように need statement ほど親しい間柄に限られた表現ではない。Imperative の中でも (2-a) Give me your pen for a minute. は男性インフォーマント全員から親しい同性の友人に対して適切な表現として選ばれたわけであるが、やはり異性の友人に対してはほぼ半数のインフォーマントがこの表現を不適切だと回答している。Need statement よりも親しい異性の友人に用いられる割合が高いことから、need statement を使う間柄ほど相手への依存度も高いと考えることができる。

ところで、女性は親しい友人にも imbedded imperative という丁寧な表現を用いているという結果となった。特に (3-a) Would you lend me your pen for a minute? という表現は、(3-b) Can you lend me your pen for a minute? についてよく使われる表現であるばかりでなく、need statement の (2-a) Give me your pen for a minute. と並んでよく用いられる表現である。男性の場合はむしろ親密度の低い友人に対して用いている。つまり、この imbedded imperative をどのような表現だと認識しているのかが、男性と女性とでは異なっているということになる。

Ervin-Tripp によると *imbedded imperative* は社会的地位や年齢の高い人に、簡単な依頼をする場合に用いられる表現ということである。⁹ ペンを貸すという行為を実行するのは、通常なら実行するのは容易である。地位の差については、友達同志なので等しいことになるが、親しくない相手と地位の高い人というのは自分と距離のある関係の人であるということ共通点があり、どちらに対しても丁寧な表現を用いることは間違いない。

一方、女性は *imbedded imperative* を親しい相手にも用いている。だが、これは女性が親しさに左右されるということよりもむしろ、女性は親しい相手にも自然に丁寧な依頼表現を用いることを表している。これは、*imbedded imperative* にならんで女性が親しい友人に用いる表現として選ばれた *imperative* の1つ、(2-a) *Give me your pen for a minute.* は親密度の低い友人に対しては用いないことから明らかである。男性は、親密度の高い相手、特に同性の友人に対して *imbedded imperative* や *permission directive* といった丁寧な表現を選んでいない。このことから、男性にとっては仲間内で丁寧な表現で依頼をするのは、かえって不自然であり、不適切だと考えていることが分かる。

Question directive は例を三つ挙げたが、それぞれの表現が異なる意味合いを持っており、それぞれ異なる結果が生れている。Ervin-Tripp は *question directive* を相手に依頼を断る余地を与える表現だとみなしている。*Question directive* はアンケートに用いた表現を見ても明らかのように、文法的には一般的な疑問文と違わない構造を持っているため、コンテキストがなければ依頼とは気づかれず、単なる質問に受け取られてしまう可能性がある。だが、これはあくまでもコンテキストがはっきりしない場合に限られ、逆にコンテキストが明白な状況で *question directive* を用いた場合には、相手を断れない状況に陥れたり、厭味や非難を含有させて相手に伝えることができる。

アンケートで選択肢の一つとした (5-a) *Do you have a pen I can use for a minute?* という表現は 'I can use' という表現を伴っているために、*question directive* だということを明示している。つまり、構造的には疑問文であるが、疑問文として認知されることはまずないと考えていいだろう。男性は、この表現を親しくない同性の友人に使う場合がもっとも多く、その他の相手に使う人は 35% 前後にとどまった。一方、女性は親しくない異性にはあまり使わず、親しい友人や親しくない同性には 40% 以上が用いている。男性はこの表現を親しくない相手に用いる表現と考えながらも、異性にはもっとはっきりと、そして丁寧に依頼を求める *permission directive* の方が適切だと考えていることが分かる。一方で、女性はこの表現を親しい友人に対してもっともよく使う (3-b) *Can you lend me your pen for a*

minute? や (1-a) I need your pen for a minute., (2-b) Let me borrow your pen for a minute. とほとんど変わらず使う。だが、女性も男性と同じように、親しくない異性に対して (5-a) Do you have a pen I can use for a minute? という表現を用いるのは適切ではないと考えていることが分かる。女性が依頼者の場合、相手の性別によって使用頻度がはっきりと異なっているのは、この (5-a) Do you have a pen I can use for a minute? と (2-a) Give me your pen for a minute. である。(2-a) Give me your pen for a minute. は親しくない異性には 35% の人が使うと答えているのに、同性には6% の人しか使うと答えていない。逆に、(5-a) の場合には、親しい異性には 24% の人しか使うと答えていないのに対し、同性には 47% と半数近くの人を選んでる。これは、女性が親しくない場合には、性別を意識し、男性にはなるべく親しい言い方で依頼をし、女性には遠回しな言い方で依頼をする傾向にあることを示している。これは、親しい男性同士は、依頼をするときに、強い命令表現である、*need statement* や *imperative* を使うため、女性もそうした男性の表現の特徴に無意識のうちにあわせ、自分をその会話の中に受け入れてもらうために *imperative* を用いるのではないだろうか。逆に、女性の場合は、親しい中でも丁寧な *permission directive* を用いることから、親しくなるまでは遠回しな表現を使って依頼をすることで、相手に受け入れてもらおうとすることになる。

(5-b) You don't have a pen, do you? という表現は、付加疑問を使った *question directive* である。Ervin-Tripp は否定文に付加疑問を伴っている *question directive* は、他の *question directive* よりも相手にとって断りやすい依頼表現だと定義している。否定文を用いていることから、*need statement*, *imperative*, *imbedded imperative*, *permission directive* とは違い、相手が依頼に応えられないことを前提に依頼をしていることが分かる。依頼者はもともと断られることを前提としているため、依頼された側としても断りやすい。実際に、Ervin-Tripp の調査では、否定文に付加疑問文を付けた依頼表現を用いた場合、約半数の割合で依頼が断られていることが明らかになっている。男性は、この表現を親しくない相手にやや多く使っており、男女別に見ると、親しくない同性に使う場合がもっとも多く、52%の男性インフォーマントから選ばれている。一方、女性は親しい相手に対してやや多く使っており、相手の性別にはほとんど影響を受けていない。この表現を使うとき、依頼者は断られても仕方ない、あるいは断られることを前提としていることを考えると、男性は断られても仕方ない依頼をする時には、親しさに関係なく同性に依頼するが、女性は男女の別なく親しい相手に依頼をすることがわかる。

(5-c) Do you happen to have a pen? という表現も 'happen' という言葉を使用していることから、(5b) 同様に依頼者が相手は依頼に応えられないことを前提として

いることが分かる。「ひょっとしてペンを持っているんじゃない?」といった消極的で遠回しな依頼表現で、男性も女性も共に、親しくない相手に用いる傾向にある。

Hitt については、他の表現に比べると男性からも女性からもあまり使われていないことが分かる。だが、(6-a) *Oh! I forgot to bring my pen.* については、男性が親しくない相手に対してかなり高い割合の人が使っており、同性には52%、異性には43%の人が使うと答えている。これは、(3-a) *Would you lend me your pen for a minute?* よりも高い割合である。Hitt とは、コンテキストがなければ依頼と受け取られず、また依頼を受けてくれるかどうかは相手次第の表現である。コンテキストなくして、(6a) のように *Oh! I forgot to bring my pen!* と叫んだだけでは、誰に依頼しているわけでもなく、いわば独り言のようなものにすぎない。そのため、そのまま無視して聞き流してしまえば、依頼ではなく、モノログとして終わってしまう。だれかがそれを聞きつけて、親切にもペンを貸してくれて初めてこの表現は依頼表現となるわけで、その意味では完全に聞き手任せの依頼表現といえる。当然、仕事上で依頼をするときに用いられることはほとんどないであろう。だが、この調査では、親しい間柄でもほとんど用いられず、明確に依頼していることが伝わる表現の方が多く用いられている。男性も女性も相手の性別による Hitt の使用頻度の差は見られず、どちらに対してもあまり Hitt を選んでいない。親しさという点からみると、男女ともに親しくない相手に Hitt を使う頻度が高い。

3. 結論 性別と親密度

「ペンを借りる」ことを依頼するのは一見簡単に思われる。だが、ペーン一つ借りるために、さまざまなコンテキストが考慮され、適切な表現を選び出していることが明らかになった。性別と親密度とを比較した場合、片方の要素がもう片方の要素に優先して考慮される、というよりも互いに絡み合っただけで依頼表現に影響を与えていた。親しさに関して言えば、男性は全体的に、親密度が低いほど丁寧な依頼表現を用いているが、同性の親しい友人に対しては極端なほど強い命令表現である、*imperative* や *need statement* を用いる傾向がみられた。一方、女性は親密な相手には強い命令調の表現を用いることもあるが、全体的に丁寧な表現を使用している。

性別ごとにみても、男性のほうが圧倒的に相手の性別によって表現を変え、女性は性別に関係なく同じ表現を用いる傾向にある。井出 (1986) の調査では、インフォーマントが大学生だという違いがあるが、男女差について本論とは異なる

結果が出ている。井出 (1986) では、より丁寧な表現に男女差が多くみられ、女性は丁寧さの高い表現のいくつかをより高くランク付けしている。一方、本調査では、丁寧度の高い表現よりも、低い表現に男女差がみられ、男性も女性も親しい相手には丁寧度の低い表現を使う傾向が見られたものの、女性は親しくない相手にも、imperative を用いていた。また、丁寧度の高い表現については、女性のほうが男性よりも親しい相手にも imbedded imperative を使って依頼をする傾向が見られた。ただし、(4b) "Can I borrow your pen for a minute?" を親しい相手に使う傾向は、男性の方に多く見られた。

今回の調査では、男女の表現の差を分析するために、性別と親密度のみに焦点をあて、依頼者の性別と依頼相手の性別、親密度の高さが依頼表現にいかなる影響を与えているかを論じたが、地位の差や依頼の内容がどのように表現に影響を与えるのかについても今後の課題として研究を続けていきたい。

(本稿は平成7年11月にアジアセンターにて行われた英米文化学会第89回例会にて口頭発表したものに加筆訂正を施したものである。)

注

1. Robin Lakoff Language and Woman's Place 1981 The Eihosha Ltd. 16-17.
2. Jennifer Coats Women, Men, and Language 1996 New York: Longman 139-140
3. Susan Ervin-Tripp "Is Sybil there? the Structure of Some American English Directives" in Language in Society 5 1976 25-66
4. Cf., 口頭発表 Naoko Akahori "PC and Kotobagari - Political Correctness Movement in Japan and in the United States" a paper read at AILA (World Congress of Applied Linguistics) Tokyo, August 1999.
5. 井出祥子他 1986 『日本人とアメリカ人の敬語行動 大学生の場合』南雲堂。この中で調査に使われたアンケートを参考に、本論のアンケートを作成した。
6. Ervin-Tripp, 37.
7. Ervin-Tripp, 29.
8. Ervin-Tripp, 37.
9. Ervin-Tripp, 34. には、"Since modal imperatives, including can imbeddings, are routinely interpreted as directives when the acts are feasible and appropriate, conversion to a question directive is necessary when the addressee's rank is high and the task difficult." と二つの directive が比較されている。

付表

(数字は%)

依頼する側	依頼される側		親しさ -		
	親しさ +		男性	女性	
	男性	女性	男性	女性	
男性	1-a	81	48	0	0
	1-b	43	33	38	14
	2-a	100	57	0	0
	2-b	95	57	14	5
	2-c	24	10	0	0
	3-a	38	38	62	43
	3-b	38	24	38	24
	3-c	19	24	67	53
	4-a	38	43	81	50
	4-b	71	52	76	43
	5-a	38	33	67	38
	5-b	48	33	52	38
	5-c	24	14	38	38
	6-a	24	19	52	43
6-b	24	10	12	5	

依頼する側	依頼される側		親しさ -		
	親しさ +		男性	女性	
	男性	女性	男性	女性	
女性	1-a	47	47	0	0
	1-b	18	18	6	6
	2-a	35	35	35	6
	2-b	47	41	12	12
	2-c	12	12	0	0
	3-a	47	47	47	47
	3-b	53	53	35	35
	3-c	18	29	59	53
	4-a	29	29	53	53
	4-b	41	41	29	29
	5-a	41	41	24	47
	5-b	38	29	18	18
	5-c	18	18	29	29
	6-a	12	12	29	29
6-b	18	18	18	18	

